

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和3年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

学校名	玄海みらい学園
1 前年度 評価結果の概要	・学校教育目標「みらいへステップ～3つの笑顔で～」については児童生徒はもとより地域にも浸透し、学校方針が広がっていた。昨年度は、県指定の学力向上推進地域指定を継続して取り組み、全職員で学習スタイルを定着させ公開授業を実施することができた。心の教育として義務教育学校の特色を出し、9か年を通した児童生徒の育成に努め、それぞれのよさを認め、何かあった場合にも早期に対応できる体制作りを行ってきたことが現在の学園の落ち着いた様子へとつながっている。児童生徒会の取り組みについては、コロナ禍の状況でできる活動が限られていたがその中で自分達の思いを具現化できるように実行してきた。課題として、今年度学力向上の取り組みを行ってきたが、児童生徒の学力への成果がまだまだ十分とは言えない。次年度も学力向上を中心とした学習スタイルを構築し、向上を促していきたい。また、児童生徒がさまざまな経験を積み中で、主体的に考え行動できるように学校を上げて仕組む必要がある。
2 学校教育目標	みらいへステップ ～3つの笑顔で～
3 本年度の重点目標	① あいさつや返事のできる児童生徒の育成と推進 ② 義務教育学校の特性を活かし、全職員が9年間の学びと育ちを意識した学校づくりの推進 ③ 生徒理解に基づいた生徒指導の充実と自主・自立の気概ある児童生徒の育成と推進

4 重点取組内容・成果指標	中間評価	5 最終評価
---------------	------	--------

(1)共通評価項目	重点取組		具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価	主な担当者	
	評価項目	取組内容		達成度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)	実施結果			評価
●学力の向上	●「授業づくりのステップ1・2・3」を踏まえたアウトプット活動の充実	●学力向上 対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師の割合が、前期課程80%以上、後期課程70%以上。	・「まとめ・振り返りシート」を作成・活用し、書く活動を確保できる授業づくりを行う。 ・授業だけでなく学校教育の様々な場面で、「話し合い」や「書く」のようなアウトプット活動を取り入れる。	A	・めあてに向かって考えたことを書いたり、まとめや振り返りを書いたことのできていますと答えた児童生徒の肯定的な割合が86%である。 ・授業づくりのステップ1・2・3を授業に取り入れ、マイプランの成果指標を達成しつつある教職員の割合が88%である。	A	・めあてに向かって考えたことを書いたり、まとめや振り返りを書いたことのできていますと答えた児童生徒の肯定的な割合が94%である。 ・「めあて」「振り返り」のある授業を行っている教職員の割合が97%で、組織的な授業改善につながっている。	A	・本校は学習に対する学習意欲不足を指摘されて久しい。研究指定等の実践を通して、改善の兆しが見られてきたので、今後も期待したい。継続した実践を願いたい。	・学力向上対策コーディネーター ・研究主任
	○基礎学力の定着と家庭学習の充実	○「授業や家庭学習に進んで取り組んでいる」と回答する児童80%以上、保護者90%以上。 ○年間を通して、各学年の「おすすめの本」貸出達成児童50%以上。(前期課程) ○家庭学習の目安(中1・中2 90分以上、中3 120分以上)を達成していると答えた生徒が80%以上。	○「家庭学習のすすめ」を配布し、家庭学習に対する保護者の意識をさらに高める。家庭学習の時間等のアンケート結果を配布し、家庭での学習に関心をもってもらふ。(全学年) ・各学年の「おすすめの本」を設定し、読書を薦める。(前期課程) ・家庭学習の量と質を考え、授業とのつながりのある課題を提示する。(後期課程)	・「家庭学習のすすめ」を配布し、家庭学習に対する保護者の意識をさらに高める。家庭学習の時間等のアンケート結果を配布し、家庭での学習に関心をもってもらふ。(全学年) ・各学年の「おすすめの本」を設定し、読書を薦める。(前期課程) ・家庭学習の量と質を考え、授業とのつながりのある課題を提示する。(後期課程)	A	・小中連携による学習時間調査を定期的に取組んだり、自学ノート展を組織的に取組むことで、家庭学習の啓発を図っている。 ・昨年度より授業や家庭学習に取り組んでいると肯定的に答えた児童生徒は、3ポイント増加した。 ・昨年度より、基礎・基本の定着を図るために、個別の指導や家庭学習の推進に向けた教職員の学習指導が15ポイント増加した。	A	・小中連携による学習時間調査を年3回取組んだり、自学ノート展を組織的に取組むことで、家庭学習の啓発を図ることができた。 ・各学年の「おすすめの本50冊」の貸出達成児童は141(40名)にとどまらず、高学年児童にとっては年間50冊という目標が過ぎたので学年に応じて目標を設定し直す必要がある。(前期課程) ○家庭学習の目安(中1・中2 90分以上、中3 120分以上)を達成していると答えた生徒が99%であったので、今後も取り組みを継続していく。	A	・学力向上の前提となる基礎・基本の徹底には、まず学習意欲の向上が大切だと考える。先生方の実践に感謝しつつ、今後は家庭教育力や地域教育力が子ども達を伸ばせることになればと思う。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○前期課程の縦割り遊びを年8回以上行い、異学年との交流を図る。 ○縦割り班での奉仕作業や集会を行う。	・前期課程児童による縦割り遊びを行う。 ・縦割り班で1年生を迎える会、仲良くなる集会、校内奉仕作業を行う。	B	・縦割り活動がコロナ禍により、滞っているが、体育大会等の学校行事を通じて、他の学年の友人とも仲良く友達と活動できていると児童生徒の肯定的な割合が81%であった。	A	・コロナ禍により制限されることはあったが、1年生を迎える会、縦割り遊び、仲良くなる集会、校内奉仕作業を実施することができた。貴重な縦割りでの活動となった。	B	・大人になった時、弱さを克服できる「芯の強さ」をもった人間になってほしい。そのために、集団の中で揉まれ鍛えられる体験をしてほしい。	・特別活動主任
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○「いじめに気が付き、注意したり、先生に知らせたりできる」という児童生徒80%以上。 ○いじめの発生時に組織的な対応ができていてと答える職員90%以上。	○「毎月末の生活アンケートを活用する。いじめの定義や事例について、全てのクラスで道德の授業や人権教室等で取り扱い、全校児童生徒の人権意識が高まるようにする。 ・発生したいじめ事案をその日のうちに共有できるように、生活部が中心となり、管理職の指示のもと全職員と連携を図る。	B	・児童生徒の80%が何らかの対応をするかと回答しているが、まだ十分ではないので今後も継続的な指導が必要である。 ・教職員の意識が高く、実際にいじめ事案が発生した場合には、チームで動き、全職員が共通理解で対応に当たることができた。	A	・生活アンケートを活用し早期のいじめ発見・対応につなげることができた。児童生徒の80%が何らかの対応をするかと答えた。 ・職員意識が高く、情報共有がスムーズにできたのでチームで対応できた。組織的な対応ができていると答えた職員は96%であった。	A	・いじめが「0」ということが、むしろ問題だと思う。相談ができる雰囲気を作るために、児童生徒との絆を深め、今後も先生方の尽力をお願いしたい。	・生徒指導主事 ・生活指導主任
●健康・体づくり	●児童生徒一人ひとりを大切に、受容と共感的理解に基づいた生徒指導の育成	○「自分で善悪の判断をしながら物事を考えて行動します」とのアンケートで達成割合90%以上。 ○「自分と友達との違いを受け入れながら、誰とも公平に接している」とのアンケートで達成割合90%以上。	○「月1回の人権集会の実施や授業を通して人権・同和教育を行い、実行できるように指導にあたる。 ・道徳教育や学校行事を通して、よりよい人間関係づくりを築ける。 ・気になる児童や生徒に関する情報交換の場(連絡協議会や教育相談等)を設けながら指導にあたる。	B	・前期課程は、月1回の人権集会を実施した。善悪の判断の項目については81%ができていると答えていた。 ・教科や道徳を中心とした人権・同和教育を行うことができた。 ・月1回のペースで児童生徒協議会を開催したり、教育相談の場を設けたりしながら共通理解を図っている。	B	・前期課程では、月1回の人権集会を継続して実施することができた。後期課程では、善悪の判断の項目については90%ができていると答えていた。 ・道徳や教科を通して、人権・同和教育を行うことができた。 ・児童生徒協議会では、来年度へ向け、気になる児童や生徒に関する具体的な手立てについての情報交換を行うことができた。	B	・学校評価アンケートにある「違い」を認め受け入れる姿勢についてだが、LGBT等の新たな課題も学校が早期に対応してくれている。	・人権・同和教育担当 ・道徳主任
	●運動習慣の改善や定着化	●授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間以上210分以上の児童、420分以上の生徒が80%以上。	・昼休みに体育館や運動場の使用割り当てを決め開放する。 ・校内持久走大会を計画・実施し、体育の時間や休み時間に運動場を走ることを呼びかける。(前期課程) ・体育の授業では、ランニングと強化トレーニングを行う。(後期課程) ・部活動への積極的な入部・参加を勧める。(後期課程)	A	・授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間以上210分の児童、420分以上の生徒の割合が80%であった。昼休みに体育館、サッカーゴール、野球場の使用割り当てを決めたことが結果につながったと考えられる。また、6年生の3学期に部活動紹介を行い、事前アンケートをとることによって、部活動入部の意欲を高め、部活動加入者が96%であったことも要因である。 ・前期課程では、今年度も持久走大会を実施し、その準備期間として2週間ほど前から昼休みに一定時間運動場を走ることに取り組んだ。	A	・授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間以上210分の児童、420分以上の生徒の割合が84%であった。昼休みの体育館、サッカーゴール、野球場の使用は児童生徒が楽しみにしており、1～9年生が順番を守り遊ぶことができた。 ・授業の最初にランニングと強化トレーニングを行い体力の維持向上につながった。 ・今年度より6年生の3学期から部活動への体験入部を行った。活動に参加することでより健康の保持増進につながると考えられる。	A	・体を動かすことは大切である。学校で取り組みをし続けているが、地域でも運動をすることを推奨していきたい。	・体育主任
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●時間外在校等時間40時間内の職員80%以上。	・タイムマネジメントを行うとともに、定時退勤日の推進や月別練習計画に沿った部活動指導や休養日の設定による負担軽減、平日の残業時間の削減を強く勧める。	A	・毎週水曜日の定時退勤日の奨励や部活動休業日の善悪な実施による負担軽減を行った。管理職より残業時間の削減を適宜行っている。 ・業務改善の目標と行動は着実に高まってきたものの、設定数値目標は達成できていない。(平均約83%)	A	・定時退勤日の推進や月別練習計画に沿った部活動指導や休業日の設定による負担軽減が効果的に働いたことにより、時間外勤務時間が40時間内が約86%にすることができた。また、「勤務時間の短縮」と子どもと向き合う時間の確保を意図して業務改善に努めていますという肯定的な意見の割合が19%であった。	A	・先生方もコロナ対応等大変だとは思いますが、健康に留意されて業務を遂行してほしいと思う。	・管理職
	○組織における協働体制の構築と校務の効率化	○小中中部会等有効活用し、校務分掌や学年間の共通理解・共通実践を通じた協働体制の構築 ○「私に組織に貢献できている」と答える職員90%以上 ○校内LANを用い、全職員が校務に関するデータの共有を図り、全職員参加の会議の時間を10%削減	○「健康に食事は大切である」と考える児童生徒90%以上。 ・朝食摂取、残菜0を呼びかける。 ・五大栄養素の大切さを食育により指導する。	B	・学園として朝食の大切さを定期的に通信等で啓発した。食の大切さについての生徒の肯定的な割合が78%にとどまらず、更に意識を高めた。 ・5年以上の家庭科の授業や前授業を通して、食の意識向上を図った。	B	・朝食摂取調査では毎日食べている児童生徒の割合が75%であった。通信等で引き続き発信していきたい。 ・出前授業や給食時間放送、放送を通して、五大栄養素の大切さを伝えることができた。	B	・朝食を摂る際に、就寝時間や起床時間が関係しているため、家庭にも啓発してほしい。 ・子どもたちには地産産の良質な食材をできるだけ提供して、玄海町の豊かさを実感してほしい。	・食育担当
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	○組織における協働体制の構築と校務の効率化	○小中中部会等有効活用し、校務分掌や学年間の共通理解・共通実践を通じた協働体制の構築 ○「私に組織に貢献できている」と答える職員90%以上 ○校内LANを用い、全職員が校務に関するデータの共有を図り、全職員参加の会議の時間を10%削減	・目標や役割を明確化し、成果と課題を基に、PDCAサイクルを機能させ、効率化を図る。 ・校内LANで校務データを共有し、誰もが利用できる環境にすることで効率化を図る。	A	・小中中部会等の共通理解・共通実践を通じた協働体制の構築が図られ、「私は、組織に貢献できている」と肯定的な割合が94%であった。校内LANによる校務データの共有を図り、職員会議の時間の削減と共に前期・後期連絡会を有効に開催することができた。	A	・小中中部会等で確認した成果や課題において、職員全体の情報共有や役割分担を明確化したこと、共同感覚が生まれ、組織に貢献できていると肯定的な割合が94%であった。また、校内LANによるデータ共有や職員会議の事前資料配布により、会議時間の短縮につなげ効率化を図ることができた。	A	・学校全体で効果的に電子化を進めているので、これからも先生方につまづいてほしい。	・管理職

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目

	重点取組		具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価	主な担当者	
	評価項目	重点取組内容		達成度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)	実施結果			評価
○母校の誇りづくり	○自ら笑顔であいさつや返事のできる児童生徒の育成	○登下校時の挨拶を自らできる児童生徒70%以上。 ○廊下等ですれ違う時に挨拶が出来る児童生徒50%以上。	・登下校時の挨拶は、子どもから挨拶をするのを待つのではなく、大人(職員)側から積極的に声をかけるように共通理解を図り、実践する。 ・生徒会とタイアップし、朝の挨拶運動を行うことで意識を向上させる。	A	・登校時に当番制で職員が通路で挨拶をすることを実践したことで、自分から挨拶する児童生徒の肯定的な割合が76%となった。 ・児童会活動や実行委員会形式で連絡説明会等で役割や出番を増やし、自己肯定感を高めたことで、廊下等ですれ違う時に挨拶ができる児童生徒の肯定的な割合が72%であった。 ・生徒会を軸として意識を向上させた。	B	・昨年度と比べ、児童生徒のあいさつへの意識を向上させることができた。朝の挨拶は77%、学校生活の中の挨拶は72%の児童生徒ができていると答えた。 ・校内各所で職員によるあいさつ運動を行うことができた。	B	・地域においてもバス通学のため、地域の方へあいさつをする機会が減ってきている。しかし、地域の行事等ではあいさつを元気にしている。今後もあいさつを自分からできるようにしてほしい。	・生活部
○児童生徒会活動の充実	○児童生徒会活動において「出番・役割・承認」による主体的な活動を仕組み、活動の質や自己有用感の向上とリーダー性の高揚	○年4回以上代表委員会を開催する。 ○年10回以上生徒会を行う。	・代表委員会を開催し、児童生徒の意見を取り入れた活動を行う。 ・地域貢献・ボランティア活動を行う。 ・生徒総会の実施。	B	・代表委員会や生徒会が、定期的に開催されたことで、生徒の自主的な活動になるようになってきた。 ・各学年の代表委員会や委員会活動などを行っている。 ・生徒会を中心に、計画的に生徒総会を実施した。 ・児童生徒の手法になる活動の肯定的な割合が73%であった。	B	・年4回以上の代表委員会や年10回以上の生徒会を行い、児童生徒の意見を取り入れた主体的な活動を行うことができた。社会福祉協議会と連携した委員会活動や審判員、年輩状を作成したり、学校周辺の清掃活動を通して、地域のボランティアに貢献した。下級生の手法になる活動の肯定的な割合が72%であった。	A	・新型コロナウイルス感染拡大の影響で、前年同様、工夫した行事が開催された。いろいろな大変だと思うが一定の成果があげられたと思う。	・特活部 ・児童・生徒会担当
○特別支援教育の充実	○児童生徒一人ひとりの理解や個に応じた指導の改善	○児童生徒一人ひとりの実態把握と理解をめざし、各学期に1回以上全職員による情報共有の場を設ける。 ○より新しい特別支援の視点を取り入れた、全職員対象の研修を年に1回以上行う。	・年度初めや学校行事の前に児童生徒指導協議会を開催したり、年度末において、情報交換の場を設けた。児童生徒の困り感を特別支援・生徒指導・教育相談の三方向から分析し、ケース会議を通してより良い支援や指導、関係機関につなげていく。 ・特別支援教育に関わる専門的な知識や経験を有する講師を招聘し、職員研修を行う。	A	・毎月、児童生徒指導協議会を開催することで、情報交換を行い、共通理解を図ることができた。 ・児童生徒の困り感を察知し、すぐにケース会議を行い対応策を講じることができた。 ・夏休み、外部講師等を開催した研修会を開催した。 ・「自分と友達との違いを受け入れられたいに同じように接している」と肯定的な割合が84%であった。	A	・毎月、児童生徒指導協議会や学年部会で児童生徒の情報共有がなされており、個別に対応したり、保護者の協力のもと具体的な手立てを講じたりするなど、柔軟に対応することができた。 ・他人を受け入れながら接していると答えた児童生徒は83%であった。	A	・就学支援に関しては、入学前から適正な支援をきめ細やかに支援してもらっている。ジェンダーの不合理性や社会の多様性等を学びさせてほしい。たくさん失敗もして、議論をして、しっかり学ばせて社会に出してほしい。	・生活部

●...県共通 ○...学校独自 ◎...志を高める教育	
5 総合評価・次年度への展望	・学校教育目標「みらいへステップ～3つの笑顔で～」については児童生徒はもとより地域にも浸透し、学校目標の共有が図られた。今年度も県指定の小中連携による学力向上推進地域指定事業に継続して取り組み、全職員で学習スタイルを定着させ、公開授業を実施することができた。学力向上の成果も多くの学年で見ることができた。心の教育として義務教育学校の特色を出し、9か年の発達段階に応じて系統的に児童生徒の育成をするために、小中連携部会を中心に、役割を明確化して早期発見・早期対応できる体制作りを整備してきたことが、現在の学園の落ち着いた様子へとつながっている。児童生徒会の取り組みについては、コロナ禍の状況でできる活動が限られていたが、その中でアイデアを出しながら主体的な活動を行うことができた。課題として、生活習慣の安定化のために家庭との連携をより一層深めたり、児童生徒が、学校行事やキャリア教育等による体験を通した実感のある学びにするために、主体的に考え、行動できたりするように学校全体で仕組む必要がある。